

△追悼 銅直 勇先生▽

銅直勇先生を偲んで

三 好 豊太郎

一

私が始めて先生の御論稿に接したのは、大正十一、二年の頃で、それは京都大学発行の「哲学研究」誌上においてであった。この当時は、なお社会学草創の時代であったために、一般に発表される論文が少い時であり、また大学の研究室の利用者も僅かな時であったので、そこで論文を読むことが楽しく、それによって強い印象を受け、先生の珍しい御姓名をものはっきりと刻まれたことを思い起す次第である。

当時の京都大学の社会学界は西田幾多郎、米田庄太郎、高田保馬などの碩学が集まり、社会学研究の大きな飛躍を遂げ、東京の社会学徒の遙かな憧憬の的になっていたのであるが、先生はまさにその圈内に居られたのであった。

二

先生の社会学研究の動機は、たまたま古本屋で見出されたアーノルド・トインビーの「イギリスの産業革命史」によってであった。それからは大学において、学ばれたゾンバルト及びフランス社会学の影響が、大きいと思われる。

トインビーによる影響として、彼の人道的な東ロンドンにおける、セツルメントにも関心を持たれ、京都大学卒業の後は京都市救済課に職を奉じ、更に大原社会問題研究所において、労働問題の調査をも行われた。従ってトインビーに私淑することが多く、先生の明星大学の研究室にはオーギュスト・コントと共にアーノルド・トインビーの肖像がかかっていた。

かつて学友の農村社会学者であった鈴木栄太郎の告別式が東京郊外のあるキリスト教会で行われた時、はからずも先生と同席したことがあった。その帰り路で、いろいろと故人の真摯な人柄を賞讃され、人物をよく洞察されていた点に敬服した。先生は社会学を学ぶと共に、生来の人間愛を育成され、温情のこもった友人に対する態度がさらに深く養われたものであらうと思われる。

三

先生からはいろいろと学問的な示唆を与えられた。生来寡黙であられたために、ある程度自分の方から、発言をせねばならなかった。何かの話のついでに、私の卒業論文の一部であった社会変動の話となった。その時、私はある先輩に自分のテーマについて、適当な参考書を探ねたところが、彼は直ちに当時新しく出版されたばかりの「わが国における資本主義精神の発達」の書を持ち出し、これは中中良い本ですから是非参考にするようにと示されたことを思い出した。私はよくそれを読み出所を明記して私の論文に引用したことを御話したところ、先生は驚いたような様子で、「いや実はあれは、私の卒業論文を友人に貸したところが、それを殆んどそのまま、その友人の姓名で出版されてしまったものです。そのあとで私の名で出版することは出来ず、そのままとなり、自分は再び新しい問題をやり直す勇氣もなく、遂に発表を断念せざるを得ず、再び新研究をする勇氣を失ってしまいました」ということであつた。

私はこの話をきいて少なからず驚いた。この出来事は言わば先生の一生涯を決定することになったことを、しみじみと感じることが出来た。

その後先生は著作集の出版について御考え中であつたようであるので、私はこの事もあり、極力それを御勧めしてゐた。それは遂に児玉学長の推進するところとなり、急速に実現して、幸いにして「銅直勇著作集」が出版されることとなった。前記の論文は、その中に含まれている「徳川時代における町人精神の発達及び其の成立」が、まさにそれに当っている。

四

「銅直勇著作集」にもられた諸論稿はその一つ一つが、読みながらにして、向学精神を湧き立たせるもので、誠に精緻な工匠の妙技に比せられるものである。常に孜孜として、学にいそしみ、新分野を開拓し、それに集中的に努力された跡が、著作集中の随所に見られる。しかも謙虚な態度をもつて、分析の視角を換えながら開拓の手を進めて居られる点は誠に敬服に耐えない次第である。論文の中では常にそこに盛られた史実を踏まえながら、古今東西の資料によつて、独自の省察を加え、実証主義に基づき、理論の新たな展開を試みられた。従つてただ単なる論理にとらわれず、それを常に事実によつて、克明に証明されようとした。この当時の社会学界の状態は、わが国においては、少数の先輩によつて西欧の社会学説が導入されたばかりの時代であり、いわば他山の石であつた時代であり、まだわが国の風土になじまないものであつた。当時の先生の努力を考えると、誠に無量の感慨にうたれる次第である。

先生は学問が無限の生命を持つことについて、崇高な信念を持ち、常に次のようにいつて居られた。「学問の世界は不死であり、著述を通じて、先人と後輩とが心的相互作用の交流を行えば、共に生きているのであり、そこに学問の無限の生命がつづき、その限りその人人の生命はいつまでもつづくものである」といつて居られた。われわれは将

来に亘って、この無限の学問の生命を意識し、その交流に参加し、その生長や発展に寄与せねばならないものと考えられる。

五

先生は長い間の教育行政への御経験により、学科の編成や、人事の配置や運営について、明白な洞察力をもち、事務に対して細密であり、人に対して懇懇丁寧であり、またそれを行うに堅忍不拔であり、教えられるところが多かった。

かつて明星大学に修士課程を設けられる時に、ある外部の教授に承諾を得ようとして先生と私と二人で御訪ねをする事に約束して、某所で待合わせをした。ところが、大部錯綜した道であったので、私は定刻すれすれに到着したのに、先生は既に御待兼の模様であつて、ようやく定刻に御訪ねすることが出来、順調に話しが進行することとなった。この人事は不幸にして最後になって、いろいろな事情のために実現を見なかったが、この場合にも人任せにせず、御自分で礼を尽くすことを、常に心がける真摯な態度がうかがわれるのである。

また長い間の教育行政の御体験の中には、いろいろな場合に遭遇され、その中には貴重な御経験が含まれていた。そして周囲の情勢が意にまかせず、運営が困難を極めた時代の御体験を積まれた。

ある時しみじみと、運営問題について述懐されたことがある。「人生にはいろいろなことがあります。周囲の人人と意見が合わずに問題が起っている時は、自分の守るべき所をしっかり行い、黙々として忍耐することです。やがては必ず、ひとりで誤解がとけ、自然に氷解する道が開かれてくるものです」といわれた。

私は学校や役所関係を通じ、何十年の間、上司につかえた経験があるが、私の一生を通じ、先生の下にあったこの十年余は、その中最も幸福な人生であったことを感じて居る。それは全く先生の長い間の学問と、人生経験から統合

され玉成された賜物であると思われ、この言葉は長く私の耳に残り、自戒の銘として堅持している次第である。

六

昭和五十二年六月、盛大な先生米寿の記念祝典が私学会館であげられ、多数の同門旧知の人人が所狭きまでに集まり、まことに和やかな会合が開かれ、先生も喜びのあまり、一兩日は眠られなかったといって居られた。

そして五十三年までは大学の講義を御続けになったが、御足が不自由なために、その三月に御退職になった。

昨年の正月には私は久し振りで、先生の御宅を御訪ねしたところ、大層御喜びになり、昔の京阪在住の社会福祉関係や、教育関係の社会学者の噂さ話や、御自身の京都在住の頃の話や、最近に興味本位に漢籍を読んで居られるなどの閑談をして、楽しく御分れをした。

その後は時々電話で、連絡をしていたところが、七月になってから、急に御病氣とのことで、取急いで御伺いした。先生は居室へとのことで、室に入ったところ、やや憔悴された御顔であったが、しっかりした態度で椅子につかれ、病氣の模様などの雑談をされたあと、大学の将来について次のように述べられた。「自分は教職者を選ぶに当って、決して出身大学の如何にこだわらず、その人の人物と能力に重きをおきました。どうぞこれからもそれを通して下さい」と。それは真底から明星大学の社会学科を愛し、その健やかな生長を祈念する声であると感じた。

私はあまり長い話をしては御体にさわるのではないかと思つて、そこそこにして御暇をしたのであるが、あとになって見ると、これが先生との最後の御分れとなったことは、呉々も残念なことである。

x

x

x

願わくばわれわれは先生の御遺志をつぎ、日本将来の大きな建設に対する社会学の意義の重要性を理解して、先生

の播かれた社会学研究の種を育て、またこれを培い、それを熟成させたいものである。そして先生の著作集にある「正受老人の人間教育」におけるような強い意識をもって、この道に精進することが出来るように念願して止まない次第である。それこそが学問の無限の生命を悟得し、更に明星大学の社会学科に対して真実な愛情を注がれた先生に対する心からの手向けではなからうか。(昭和五十五年一月)

(みよし　とよたろう、本学主任教授)